

特集展示

横尾忠則

水のように

Ever-Changing, Like Water

東京都現代美術館

コレクション展示室

主催

東京都

公益財団法人

東京都歴史文化財団

東京都現代美術館

Special feature YOKOO Tadanori

2023
12.2_{Sat.} → 2024
3.10_{Sun.}

生誕
100年

サム・フランシス

100th Anniversary of Birth | Sam FRANCIS

歩く、 赴く、 移動する

From the
Walking, Traveling, Moving—
Great Kanto Earthquake to the Present
1923 震 2020

MOT
MUSEUM CONTEMPORARY TOKYO
東京都現代美術館

MOT
コレクション

MOT Collection

Saturday, 2 December 2023 – Sunday, 10 March 2024

Museum of Contemporary Art
Tokyo, Collection Gallery

東京都現代美術館では、戦後美術を中心に、近代から現代にいたる約5700点の作品を収蔵しています。「MOTコレクション」展では、会期ごとに様々な切り口を設けて収蔵作品を展示し、現代美術の持つ多様な魅力の発信に努めています。

1階では、「歩く、赴く、移動する 1923→2020」と題し、1923年の関東大震災後に鹿子木孟郎が上京し、被災地を歩いて描いたスケッチから、2020年、移動の自由が制限されていたコロナ禍における当館での個展に際して制作されたオラファー・エリアソン作品まで、「歩く／赴く／移動する」をキーワードに多彩な作品で構成します。藤牧義夫の傑作《隅田川両岸画卷》(1934)や、戦後のルポルタージュ絵画などを展示するほか、「MOTサテライト」(2017-2020)を機に制作されたクサナギシンペイ、光島貴之、ワタリドリ計画(麻生知子、武内明子)の作品や、当館での個展(2021-2022)を機に収蔵された久保田成子の映像などの新収蔵作品も併せてご紹介します。約100年の時に跨る様々な作家たちに歩みを重ねることで、私たちが生きる世界や社会への視座を高める機会となれば幸いです。

3階では、「特集展示 横尾忠則—水のように」と題し、1960年代から近作まで、新たに収蔵した作品を中心に展示します。横尾忠則は、1960年代からグラフィック・デザイナー、イラストレーターとして活躍し、80年代に絵画に主軸を移して以降現在にいたるまで、幅広い分野でたゆみなく制作を続けています。当館では2021年に、絵画に焦点を当てた大規模な企画展「GENKYO 横尾忠則 原郷から幻境へ、そして現況は？」を開催しました。このたびの特集展示では、この個展を契機に収蔵した作品や、個展には出品されなかったグラフィック作品を交えて構成します。横尾の作品は、60年以上に及ぶ活動のなかで、「水のように」千変万化してきました。今回は作品のなかの「水」の表現に注目することで、新たな魅力を探っていきます。併せて、横尾とゆかりの深い作家の作品もご紹介します。

また、「生誕100年 サム・フランシス」と題し、展示室いっぱいに広がる大きな絵画のシリーズを展示いたします。

多種多様な作品とともに、思い思いのひとときを過ごして頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本展の開催にあたりご協力を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

The Museum of Contemporary Art Tokyo houses approximately 5,700 artworks in its extensive collection, which spans the modern and contemporary periods with a focus on art of the postwar years. Each installment of the “MOT Collection” exhibition introduces artworks in the collection from various themes and angles in its effort to convey the diverse appeal of contemporary art.

The first floor section, “Walking, Traveling, Moving: From the Great Kanto Earthquake to the Present,” comprises of a diverse array of works, from sketches drawn by KANOKOGI Takeshiro who visited Tokyo after the 1923 Great Kanto Earthquake to document the devastated areas, to works by Olafur ELIASSON that were produced for his solo exhibition at MOT in 2020, when restrictions on freedom of movement were in place as a result of the COVID-19 pandemic. FUJIMAKI Yoshio’s masterpiece Scenes from the Sumidagawa River (1934) will also be exhibited, along with newly acquired works by KUSANAGI Shinpei, MITSUSHIMA Takayuki, and Wataridori Keikaku (ASO Tomoko, TAKEUCHI Akiko) that were created in correspondence to the “MOT Satellite” exhibitions (2017-2020), as well as single channel videos by KUBOTA Shigeko that were added to the collection in correspondence to her solo exhibition at MOT (2021-2022). We hope that this exhibit, by following the footsteps of artists spanning a period of approximately 100 years, will provide an opportunity to enhance our perspective on the world and society in which we live.

The 3rd floor section titled, “Special feature: YOKOO Tadanori — Ever-Changing, Like Water” introduces works spanning from the 1960s to recent, centering on those newly added to the museum’s collection. Yokoo Tadanori has worked as a graphic designer and illustrator since the 1960s, continuing to develop his oeuvre across a wide range of fields after shifting his focus to painting in the 1980s. In 2021, the Museum of Contemporary Art Tokyo held a large-scale exhibition focusing on Yokoo’s paintings titled, “GENKYO YOKOO TADANORI.” On this occasion, we present a combination of works that were collected in correspondence to his solo exhibition as well as a selection of his graphic design projects that were not showcased at the time. Yokoo’s work has undergone a myriad of transformations “like water” throughout his extensive career of over 60 years. The exhibit explores new appeals of his artistic practice through focusing on expressions related to “water” that appear in many of his rich variety of works. In addition, works by artists that inspired Yokoo will be presented.

Also featured is a series of large-scale paintings by Sam FRANCIS, of which 2023 marks his centennial.

We hope visitors will take the opportunity to freely enjoy the diverse variety of works.

In closing, we would like to express our heartfelt gratitude to all of those who have honored us with their unstinting cooperation in realizing this exhibition.

1. 東京を歩く

Tokyo Observed Through Walking

街を歩き、そこで出会った風景を描くこと——冒頭の一章では、今年100年の節目を迎えた関東大震災から、第二次世界大戦後までの東京の風景を一堂に展示します。

1923年9月1日に起こった関東大震災は、9万人を超える死者を記録した甚大な火災をも引き起こしました。鹿子木孟郎(1874-1941)も一報に接し、同月の内に日本画家の池田遙邨を伴い京都から上京します。二人は時に罹災者の批難を浴びながらも、焼け野となった隅田川を挟んだ下町の風景を写生して歩きました。フランスの歴史画家ジャン=ポール・ローランスにアカデミックな写実技法と画面構成を学んだ画家は、のちに写真やスケッチなどを元に《大正12年9月1日》を描きました。煙くすぶる瓦礫のなか逃げ惑う人々に肉薄した視点でドラマチックに構成した歴史画です。一方、現地で描いた数多のスケッチでは、焼け跡の倒壊した建物や、瓦礫を掘り起こす人々を距離を取った地点から冷静に眼差し、鉛筆などによる迷いのない線でその輪郭を捉えています。

美術家で新聞漫画家でもあった柳瀬正夢(1900-1945)は、ドイツから帰国した村山知義らと結成した大正新興美術運動のグループ「マヴォ」の第1回展を終えて間もなく、東京で被災します。震災の混乱に乗じて社会主義者を取り締まる憲兵隊に逮捕された柳瀬は、釈放後、父の住む門司に一旦逃れたものの、翌月には沢山の支援物資を担ぎ、まだ戒厳令の解けぬ東京へと帰還しました。その道中を記録する日記と共に3冊のスケッチブックが残されています。そこには1か月ぶりに戻った都市の只中から、被害の跡が生々しく残る街や人々の生活をつぶさに捉えようとする姿が見て取れます。こうして多くの画家が東京を歩き、各々の距離感をもって街を見つめ、その風景や体験を記録する絵を残したのです。

それから約10年後の隅田川兩岸の風景を白描で仕上げたのが、24歳で失踪した版画家・藤牧義夫(1911-1935)です。復興後の都市計画で再建された白髭橋など近代的な都市の姿と、江戸らしい街並みが同居する川べり——様々なパースを組み合わせ、此岸から対岸を望む視点に、時に対岸に渡りその先を眺める視点をも繋げるという驚異的な「編集」*によって生まれた大パノラマは、独特の寛ぎをもった川辺の道行きを私たちに与えてくれています。

このほか戦中戦後の松本竣介(1912-1948)のデッサン、ここ10年程の間に収蔵された桂ゆき(1913-1991)や朝倉摂(1922-2014)の資料群に含まれる敗戦後のスケッチなど、二度の焼け野を経た東京における作家たちの歩行と眼差しが、時を超えて幾重にも交差します。

*大谷芳夫「藤牧義夫 真偽」学藝書院、2010

2. 現場に赴く

Visiting the Site

本章では、戦後日本において政治的／社会的な事象の現場に赴き、それを取材して描く「ルポルタージュ絵画」と呼ばれる表現を見せた作家たちを取り上げます。

敗戦直後の日本では、食糧不足などで生活に困窮する人々が溢れ、労働運動や民衆運動が盛んに展開されていました。1950年には日本が後方基地となる朝鮮戦争が始まり、占領期が終わり主権を回復した1952年以降も600以上の米軍基地が残る状況のなか、全国規模で基地反対闘争や平和運動が活発化していきました。1952年、尾藤豊(1926-1998)ら前衛美術会のメンバーは、米軍基地の電源を供給するとされたダム建設について、その反対を支援する小河内村文化工作隊に参加します。翌年には、このような課題と向き合い平和を希求する若者たちが連帯して「青年美術家連合(青美連)」が結成されました。当時20代だった尾藤豊、池田龍雄(1928-2020)、中村宏(1932-)もこれに参加しています。

《帰路》は、青美連が主催した無審査アンデパンダン展の第1回「ニッポン展」の出品作です。尾藤の地元である赤羽は、かつて火薬庫だった建物に大陸からの引揚者や被災者が多数住み、在日米軍直轄の兵器工場(PD工場)も置かれていました。工場に暗く垂れ込める空と、赤土の台地の橙色が不穏なほど鮮やかなコントラストをなす風景を背に、口を堅く結び工場から家路につく労働者の姿が描かれています。他方、池田は1953年、グループ「エナージ」の仲間と試射場の建設反対運動が起こっていた石川県内灘村に赴きます。この時のスケッチを元にした《網元》では、船＝漁場を差し出しつつ、首に幾重にも太縄が巻かれ、現実と建前に引き裂かれる網元の姿が戯画的に描き出されています。中村は、立川基地の拡張反対運動に取材して描いた《砂川五番》の後、1956年以降は、皇居前広場でデモ隊と警察部隊が衝突した「血のメーデー」(1951)の後に取り上げた《革命首都》をはじめ、新聞、雑誌や文学を資料にしながら、現場に赴くルポルタージュとは異なる仕方で現実社会に鋭い眼差しを向けました。朝倉摂(1922-2014)もまた1950年代に仲間の美術家たちと全国の炭坑や窯場、漁村へのスケッチ旅行を繰り返し、労働者をモチーフにした作品を数多く残しています。こうして若き作家たちは、一筋縄では行かない戦後日本の現実と直接対峙し、絵画という場においてそれと格闘していました。

また尾藤は1957年、青美連での話し合いを経て、海外渡航がまだ自由化されない中、モスクワで開催された世界青年学生平和友好祭に派遣されました(次章で紹介する中野淳も同年に参加)。《シベリア紀行》ではそのときの車窓風景に着想を得て、横から見た建物の形が抽象化され、画面内を回転するように次々と展開する、新たな表現が獲得されています。

3. 清澄白河を歩く

Walking in Kiyosumi-Shirakawa

深川、木場、清澄白河……本章では、美術館が建つ地域周辺を歩いた作家たちに光をあてます。

戦時下に銀座で開かれた新人画会展で、松本竣介の《運河風景》に感銘を受け、交流を深めた中野淳(1925-2017)は、1948年に自由美術協会の最年少会員となり、まもなく生まれ育った下町から杉並に拠点を移しました。かつて隅田川沿いで空襲による死者を数多く目撃した画家が戦後10年以上たち、「汚濁した川」に「惨めな戦後」を見出しつつ、そこに「おさないころの清らかな追想」を重ねるように描いたのが下町シリーズです*。70年代には深川木場の一連の風景画をその集大成として仕上げました。天気や季節を問わず運河を歩き、ペンや筆を走らせた《[下町スケッチ]》には、都市計画＝新木場への移転によって消えゆく風景の記憶が留められています。この時の手描きの地図の中心は木場にあり、現在の木場公園に美術館が建つ位置と丁度重なっています。

「MOTサテライト」(2017-2020)は、当館の改修工事を機に、下町情緒や水辺の光景を残しつつ新たな賑わいが生まれるこの地域との繋がりから企画されました。これを機に収蔵した作品をコレクション展で初展示します。「ワタリドリ計画」(2008結成)は、麻生知子(1982-)と武内明子(1983-)が、暖かい場所と餌を求めて移動する渡り鳥のように日本全国を旅し、各地を題材に展示を行うプロジェクトです。最終回となった「2020」(展示は翌年に延期)は、まさにコロナ禍の中で準備が進められ、「旅の手彩色絵葉書」でもマスク姿の二人が並んでいます。深川界限に降り立った二人はそんな時だからこそいつものように、印象に残った旅の風景とその体験から、絵画、陶、映像、そしてカルタなど沢山の作品を制作しました。光島貴之(1954-)は、10歳で失明して全盲となり、触覚と音、匂い、対物知覚などで認識した風景を造形として表現しています。細い釘のラインで表現される歩行の軌跡や、足で感じた清澄庭園の玉砂利、こどもたちの声、脇を通り過ぎた自転車、お店の中で過ごした時間……私たちは指先を通して、光島が体験した清澄白河の駅から美術館までの道行きを絵巻のように辿るのです。クサナギシンペイ(1973-)は、清澄白河周辺を舞台とした宮本輝の小説の挿絵を手がけたことをきっかけに、「清澄白河」が2000年になってつくられた新しい駅名で、町名としては存在しないことを知りました。絵画とはこの駅名のように「現実と非現実の間にまたがる、名実共に半透明の中間領域」**なのではないか——そう考えたクサナギの手で淡い色層が幾重にも重ねられた大画面は、人々の記憶や空想の中に存在する風景があわいとなって投影されたスクリーンのように立ち現れています。

*中野淳『画家たちの昭和 私の画壇交流記』中央公論新社、2018

**クサナギシンペイ『清澄界限』求龍堂、2013

4. 世界を歩き、移動する

Walking and Moving Around the World

本章では1960-70年代および現代において、世界を旅しながら制作する作家たちの作品をご紹介します。

1964年に渡米し、フルクサスの活動に加わった久保田成子(1937-2015)は、ナムジュン・パイクと共同生活を始めた1970年頃にビデオを用いた作品制作に取り組み始めます。1972年、肩から掛ける携帯用ビデオデッキ、ポーターパックを手に入れると、のちに「ブローケン・ダイアリー」として纏める自伝的映像の制作を始めました。初期作品では肩にずっしりと重い機材を自ら担ぎ、ヨーロッパ各国やアリゾナなどに出かけて行って異文化を全身で浴びています。《ビデオ・ガールズとナヴァホの空のためのビデオ・ソング》は、共にライブイベントを行った女性グループの仲間セシリア・サンドヴァルの故郷である、アリゾナのナヴァホ族先住民居住区を訪れた様子を記録したものです。久保田は女家長制の家族のもとに滞在し、ヤギを捌く場面などに初めて立ち会い、彼らと対話し、ビデオを回し続けます。冒頭と最後には、ナヴァホ族を写したモノクロームの映像に、久保田の顔を大写真にしたカラーシルエットが次々に重なることで、彼らの暮らしを体験した作家自身の存在が鮮烈な残像のように浮かび上がります。

リチャード・ロング(1945-)は、同時代のアメリカなどにおける大掛かりなランド・アートとは対照的に「歩行」という慎ましやかな行為を制作の軸に据えました。作家はイギリスはもとより、世界中の山岳や荒野、海岸など自然の広がりの中をひとり歩いていきます。《イングランド》では一面に咲くデイジーを摘み取りながら進むことで、草原に交差する直線を浮かび上がらせています。こうして行為を写真に残す一方、《STICKS》などの作品では拾った枝や石を室内に持ち込み、先史時代に遡るような極めて単純な基本形——円形、矩形、線などを私たちの歩く床に出現させています。

このほか、先住民族マオリの聖地でもある原生林(THE VOID)や、世界各地の先史時代の壁画(NEW DIMENSION)、環状に広がる北極圏の地域など、太古から続く人間の様々な営為と出会い、自然と交感する旅を続ける石川直樹(1977-)の写真や、満月の夜にこの地上に生きる生命としてのリズムを自分の中で確認するように各地で石を拾う栗田宏一(1962-)の《POYA DAY》などもあわせて展示します。様々な土地を歩き、移動した作家たちに、歩行や眼差し、思考を重ねながら、多彩な作品をご覧ください。

5. 移動としての作品

Artworks Born From Movement

これまで作家たちが街や自然を歩き、世界を移動する中で生み出された作品を辿ってきました。本章では、作家の手や体を介さず、移動＝輸送そのものが記録されたオラファー・エリアソン(1967-)による作品をご紹介します。

アイスランド系デンマーク人であるエリアソンは、1990年代から、色や光で知覚の仕組みを問いかける彫刻作品や、自然現象を再構築する体験型のインスタレーションを通して、人間をめぐる環境や世界への気づき、新たな感覚をもたらす作品を数多く発表してきました。1995年に立ち上げた「スタジオ・オラファー・エリアソン」では多数のスタッフ——職人、建築家、美術史家、デザイナー、料理人、技術者などの専門家と協働し、実験やリサーチ、作品制作などが日々行われています。近年は環境問題に意識を向け、スタジオの活動それ自体をサステイナブル(持続可能)なものに置き換える取り組みが進められています。

2020年に開かれた当館での個展「オラファー・エリアソン ときに川は橋となる」もまた、持続可能な生を未来に見すえ、「伝統的な進歩史観を考え直すためのきっかけ」となる、「視点のシフトの可能性」を示すものとして構想されました。その際、作家とスタジオは、展覧会をつくる構造自体に批評的な眼差しを向け、作品を従来使用されてきた空路ではなく、陸・海路、つまりトラックでベルリンからハンブルクへ、鉄道でポーランドを経由しロシア、中国へ、そこから船で日本へと輸送することにしたのです。《クリティカルゾーンの記憶(ドイツ-ポーランド-ロシア-中国-日本)》では、輸送に関する二酸化炭素排出量を減らし、気候変動への働きかけを象徴するこの「移動」そのものが作品化されています*。道中の振動や傾きに応じてペン先が紙上を動くドローイング・マシンを輸送箱に設置することで、約2か月にも及ぶ移動の軌跡が抽象的な線描へと置き換えられています。またコロナ禍において作家の来日がかかわ

*クリティカルゾーンとは大気や水、土、生物等が複雑に影響し合って形づくられる地球の表面を意味します。

6. 想像／創造の歩みと飛翔

Walking and Flights of Imagination/Creation

最後となる本章では、第二次世界大戦中にヨーロッパで抑留生活を送った作家と、現代に生きる本を素材とする作家の作品を取り上げ、作家たちの想像／創造の歩みに光をあてます。

末松正樹(1908-1997)は、19歳のときに見た映画で、第一次世界大戦後にドイツで生まれた前衛舞踊、ノイエ・タンツに魅せられました。1933年に上京した後は、藤牧義夫も一時期勤めた銀座の図案社を手伝った短い期間があったものの、国内初のノイエ・タンツのスタジオに学び、舞踊に情熱を注ぎます。そして1939年、パリでの日本舞踊展覧会での公演に同行するため、日中戦争中に特別に渡航許可を得て渡欧の夢をかなえました。末松は、第二次世界大戦の勃発後もヨーロッパに留まることを希望し、マルセイユの領事館に職を得ます。しかしやがてそこにも連合国軍の攻撃で戦火が迫り、中立国であるスペインに逃れようとした道中、国境まぎわのベルピニャンで敵性人として逮捕され、投獄されました。その後、ホテルに移ることはできたものの、1年半に及ぶ軟禁生活を送ります。その間、末松は、紙に鉛筆で繰り返し群舞する人々の姿を描きました。その数百枚にも及ぶデッサンでは、身体の自由な動きを思い描いて引かれたであろう数多の線が画面上を舞い踊っています。移動が制限されるなか、それでも描くことで踊り、歩み続けたベルピニャンでの生活は、帰国後に抽象画家として活動を展開することになる末松の確かな立脚点となったのです。

福田尚代(1967-)は、書物や郵便物などを素材に、言葉や文字にまつわる作品を制作し続けている作家です。幼いころから本と親しみ、大人になるまでは「夜毎ヴェルヌの『海底二万海里』をひらかずには眠れなかった」という福田は、そうして繰り返し読んだ大切な本のページを切り落とし、紙に針を通し、刺繍糸で小さな結び目をいくつも重ねていきます。このような制作は、読み物としての本を一冊失うと同義であると言うこともできるでしょう。しかし、柔らかな糸を書物／文字の中を通して何度も行き来させることによって、空想して歩いていた本の中の世界にじかに触れ、「言葉が内包する景色に挟まれつつ、蛇行する筆跡を奥へ奥へと辿っていく」*ことで、本と自らを一体化させていくような、唯一の創造の時が生まれるのです。その連なりは、いま私たちの目の前に、小さな「窪地の苔の緑」*となって現れています。

こうして、実際に世界を歩き、移動し、未知のものと出会う旅にでかけるのと同じように、私たちは自らの想像力をもって歩み、飛翔することで、どんな時にあっても新たな地平を開くことができるのかもしれません。

*福田尚代『ひかり埃のきみ 美術と回文』平凡社、2018

カリフォルニア生まれの抽象表現主義の画家として知られるサム・フランシス(1923-1994)の生誕100周年を記念し、当館に寄託されている大型の絵画作品(アサヒグループジャパン株式会社所蔵)を一堂に展示します。

サム・フランシスの画業は、1944年、陸軍航空隊の飛行訓練中の事故によって脊髄結核を患った病床に始まります。文字通り寝たきりの入院生活中に、セラピーとして水彩画を描き始めたフランシスは、やがて本格的に美術を学びます。その後1950年にパリに渡ると、アンフォルメルとの興隆するヨーロッパで新進画家として注目を集めました。また、1957年の世界旅行の際に初めて来日して以降、日本と深いかわりを持ちながら画業を展開した画家でもありました。この一室に並ぶ1985年制作の作品は、過去の自作に見られる様々な要素が大胆かつ大らかに構成された大作で、国内を巡回した個展を機に日本にもたらされたものです。

フランシスは1960年代半ば——ヨーロッパや日本にもアトリエを残しつつ、故郷カリフォルニアに拠点を移して間もないころから、カンヴァスを床に置き、乾きの早いアクリル絵具を用いて制作するようになったといいます。《無題(SFP85-95)》、《無題(SFP85-109)》、《無題(SFP85-110)》にみられる、水をたっぷりも含んだ色の滲みや、白い空隙を内包しつつ、上下にたゆたう帯状の流れは、絵具の飛沫や、鮮やかな色の塊、宙を舞うように放たれた細い線などを伴いながら、独特の浮遊感をもたらしています。「自分は本当は、飛んだり浮かんだりしていたんだけど、重力というものが自分を縛っているからできない。絵を描くことはそれから解放される唯一の方法だ」*、かつて画家はこのような言葉を残しました。絵画の中に広がる空間に深々と身を委ねることで、私たちの感覚も新たに開かれていくようです。

* Peter Selz, *Sam Francis*, New York, 1975, p. 14 / 『サム・フランシス展』図録、出光美術館、2000、p.69

横尾忠則のゆかりの作家たち

The Artists that Inspired YOKOO Tadanori

横尾忠則(1936-)の特集展示にあわせて、横尾とゆかりの深い作家の作品を紹介します。

ジュニア・ポートレット(1941-2022)は1980年に日本に滞在し、版画工房「シムカ・プリント・アーティスト」で制作をしました。横尾は憧れと尊敬を抱いていたこの作家と同じ時期にこの工房で制作する機会を得ます。そこで油性描画材を筆につけて版に直接描く新しい手法を彼女と共に試みたことから、絵画的な表現による版画を制作するようになりました。ポートレットの作品は、絵画と彫刻を組み合わせた連作になっています。そこでは卵から孵った鳥が火の粉を浴びて墜落し死ぬさまが表されており、それは時を経て蘇る不死鳥や火の鳥の伝説を想起させます。ポートレットは絵画のなかのイメージの世界と現実の空間とを同じモチーフで往還させることで、この物語に宿る輪廻転生の宇宙的な時間をこの場に現出させようとしているのかもしれませんが。

サンドロ・キア(1946-)の巨大な作品《メランコリックなキャンプ》は、1982年に描かれました。この年、横尾は画家として最初の個展を開催し、その後の活動を予見させる《滝》を描いています。この頃「新表現主義」と呼ばれる大きな変化が国際的に起こりました。それまでのミニマル・アートやコンセプチュアル・アートへの反動から、大画面に向かって肉体的に絵筆を揮う、感情的で具象的な表現が復活します。その特徴として、神話や歴史の主題、美術史からの引用、コラージュ的な構成、複数の曖昧な時空間の混在が認められます。キアや横尾の作品は、同時代的な意識からもたらされたこの動向のなかに位置づけることができます。横尾はキアについて「絵画それ自体を素材にして『遊んでいる』」と記しており、それは横尾の制作にも通じるものでしょう。

アンディ・ウォーホル(1928-1987)は、1950年代から晩年まで、カメラで身の回りのものを記録しました。横尾が50年以上日記をつけ続ける姿勢とも繋がるのではないのでしょうか。ウォーホルの作品では、ほぼ同じ構図の写真が4枚1組で縫合されています。それによって生じた十字のつなぎ目がイメージのズレや傾きを強調し、裂け目を連想させます。マリリン・モンローやウォーホルのポートレイトを用いた作品と同じように、これらのありふれた光景が反復されることで、その固有性が削がれて希薄で虚ろなイメージに転化し、そこに死や崩壊の影が兆してくるようです。

特集展示 横尾忠則——水のように

Special feature | YOKOO Tadanori—Ever-Changing, Like Water

1 | はじめに

横尾忠則(1936)は、1960年代にグラフィック・デザイナー、イラストレーターとして活躍し、1980年代に絵画に主軸を移したのち現在にいたるまで、幅広い分野でたゆみなく制作をつづけています。このたびの特集展示では、1960年代から近作まで、新たに収蔵した作品を交えてご紹介します。

1980年に画家になる決意を表明して最初に出版された作品集『横尾忠則画帖』(1981)に、美術評論家の東野芳明(1930-2005)との対談「水のように——横尾忠則の変貌」が掲載されました。まさしく「水のように」横尾の作品は千変万化しています。今回の展示では、「水」の表現に注目することで新たな魅力を探っていきます。

2 | 水のある風景

横尾の作品の大半は風景画です。特に水のある風景が多く描かれています。海、波、水平線、滝、洞窟、雨、水浸しの室内もここに含まれるでしょう*。こうした水のある風景は、横尾が兵庫県西脇市の加古川のそばで育ったことや、蟹座で一白水星という水に関わりの深い生まれであることとどこかで繋がっているのかもしれない。

60年代の横尾の作品は、画面の中心に大きなモチーフがあるものや左右対称のシンメトリーの構図をとるものが多くあります。そのなかに描かれている水は、突進する飛行機や沈没する船など事件・事故を思わせるものが添えられていたり、物語の展開を盛り上げる仕掛けのように登場人物を囲んでいたりします。こうした水の要素が画面に入り込み、ほかの断片的なモチーフと衝突することで、元々の構図に備わっていた秩序や調和を乱す動きが生まれてくるようです。水には「水をさす」というように、「間に入って円滑な交流(進行)のじゃまをするもの」という意味もあります**。作品のなかの水は、不穏な気配を漂わせながらあたりを乱し、それゆえに人の眼を惹きつける効果をもっているのではないのでしょうか。

*特に水平線の表現については、出原均「絵画の視点の導入」『横尾忠則展 枠と水平線と…グラフィック・ワークを超えて』図録(横尾忠則現代美術館、2014)で論じられています。

**『新明解国語辞典第5版』(三省堂、2000)

3 | 風景の器

水は、器によってどんなかたちにもなります。横尾は、風景を容れるための器としていくつかの手法を用いています。①縁取り。すでに指摘されているように、多くのグラフィック作品は枠で囲まれています。それは、黒く縁取られた死亡広告のようでもあり、どこか禍々しさを帯びた観光ポスターにも見えます。②反復。モチーフや構図の反復は横尾の最も特徴的な手法です*。版画のプロセスを活かした作品もこの手法のひとつと捉えるこ

とができます。③中心軸の強調やシンメトリーの構図。特に70年代の理想郷「シャンバラ」を描いた作品では△を基調とする安定した構図が特徴的です。④ヤレ。印刷物の重ね刷りから着想された手法です。高校卒業後に就職した印刷所で、印刷インクが紙に定着するまで、不用になった印刷物に重ね刷りをしたもの(ヤレ)に、「四次元の世界の表象」のような驚きと美しさを感じたと記しています。イメージを組み合わせた数々のカラージュは、ヤレの展開と見るができるでしょう。

*『横尾忠則展 反反復反復』図録(横尾忠則現代美術館、2012)

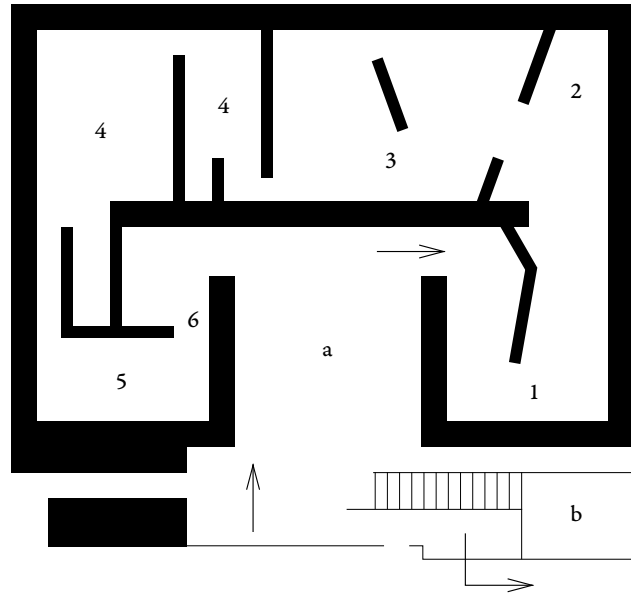
4 | 水・鏡

水面にすがたが映ることから水鏡というように、水は今いるところとは別の世界を映し出す鏡にもなります。横尾はこうした鏡の力で、見たことがあるようで見たことのない世界を開いていきます。作品のなかのひとつひとつは、何が描いてあるか判別できます。何かの模写や引用も多くあります。けれども、文字が反転していたり、ほかのものとも組み合わせられたりすることで、不可思議な世界が目の前に広がっていくのです。横尾の作品は鏡のようにあらゆるものを画面に取り込み、あたかも万華鏡のようにイメージが反復し増殖していきます。横尾にとって「ヤレ(破れ)」はイメージの重なり合いを示すものですが、モチーフが透明になり、そこに滝が流れているように見える作品も、こうした「ヤレ」と結びつくでしょう。破れ目から思いがけない世界が覗くように、横尾はこの世もあの世も混然となった世界を創り出しています。

5 | 相似形

1994年に出版されたエッセイ『天と地は相似形』(文庫本は『私と直観と宇宙人』)の表紙には、水を介して相似形を成す富士山にトランプのハートのAが重ねられています。富士山に見守られながら執筆したとあることから、富士山へのお返しをこめて、まるで天地の間で遊んでいるかのような本です。それは、あちらの世界とこちらの世界を芸術で結ぶ横尾の活動を示していると言えます。あれとこれ、そのどちらかを選ぶのではなく、あれもこれも、という姿勢は、作品に登場するふたつものにも表れています。滝と洞窟、男性と女性、横尾の画業を代表するシリーズである「Y字路」で画面に広がるのはふたつの道で、「寒山拾得」もふたりの僧です。それは、どちらも在って、それらが相互に影響を及ぼしあいながら、永続的に変化していくという考えを表しているのではないのでしょうか。

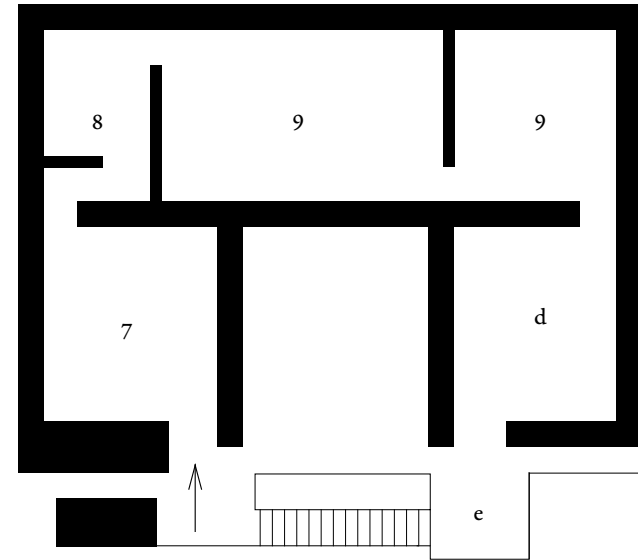
「ぼく自体、生きるということに形を持っていないということが必要だと思うんです。」1981年の画集で語られた、その水のような生き方が、あちらとこちらを自由自在に行き来する創造に繋がっています。



- | | |
|----------------|--|
| 1. 東京を歩く | 1. Tokyo Observed Through Walking |
| 2. 現場に赴く | 2. Visiting the Site |
| 3. 清澄白河を歩く | 3. Walking in Kiyosumi-Shirakawa |
| 4. 世界を歩き、移動する | 4. Walking and Moving Around the World |
| 5. 移動としての作品 | 5. Artworks Born From Movement |
| 6. 想像／創造の歩みと飛翔 | 6. Walking and Flights of Imagination/Creation |

- | |
|-----------------------|
| a. アルナルド・ポモドーロ、オノ・ヨーコ |
| b. トミエ・オオタケ (大竹富江) |
| c. 鈴木昭男 |

- | |
|-------------------------------|
| a. Arnaldo POMODORO, ONO Yoko |
| b. Tomie OHTAKE |
| c. SUZUKI Akio |



- | | |
|---------------------|---|
| 7. 生誕100年 サム・フランシス | 7. 100th Anniversary of Birth Sam FRANCIS |
| 8. 横尾忠則のゆかりの作家たち | 8. The Artists that Inspired YOKOO Tadanori |
| 9. 特集展示 横尾忠則——水のように | 9. Special feature YOKOO Tadanori—
Ever-Changing, Like Water |

- | |
|-------------|
| d. 宮島達男 |
| e. アンソニー・カロ |

- | |
|--------------------|
| d. MIYAJIMA Tatsuo |
| e. Anthony CARO |

MOT コレクション

歩く、赴く、移動する 1923→2020

特集展示 横尾忠則—水のように

生誕100年 サム・フランシス

2023年12月2日(土)→2024年3月10日(日)

執筆

水田有子 (pp.5-11)

藤井亜紀 (pp.12-14)

翻訳

ベンジャー 桂

デザイン

三木俊一(文京圖案室)

編集・発行

東京都現代美術館 ©2023

MOT Collection

Walking, Traveling, Moving

—From the Great Kanto Earthquake to the Present

Special feature | YOKOO Tadanori—Ever-Changing, Like Water

100th Anniversary of Birth | Sam FRANCIS

Saturday, 2 December 2023 – Sunday, 10 March 2024

Texts by

MIZUTA Yuko (pp.5-11)

FUJII Aki (pp.12-14)

Translated by

Kei BENDER

Designed by

MIKI Shun-ichi (Bunkyo-zuan-shitsu)

© Museum of Contemporary Art Tokyo 2023